12 月 24 日のメッセージ

聖書:ヨハネによる福音書 1:1-14

「わたしたちの間に」

「クリスマスおめでとうございます。」

1年前のクリスマス礼拝も、この挨拶から始めたのを記憶しています。多くの制限が取り払われて、明るく迎えることのできた喜びを私たちは分かち合いました。さらに制限が少なくなった今年はより一層、と言いたいところですが、私たちの世界を取り巻く空気は重いままです。

1 年前も終わる気配を見せなかったウクライナにおける戦争は今もまだ先が見えません。パレスチナのガザを廻る戦争は、ますます一方的な破壊が続けられています。各地から届けられる人権侵害のニュースも已むことがありません。アドベントクランツの明かりは増えているのに、心にはずっと帳が下りたままのような、そのような気さえします。

しかし、私たちの心持ちがどうであろうとも、神は決して救いを諦めたりはされません(「しかし、わたしたちの救い主である神の慈しみと、人間に対する愛とが現れたときに、神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました。」テトスへの手紙 3:4-5)。

暗闇としか思えないこの世界に、神は光を送ってくださいます(「光は暗闇の中で輝いている。」ョハネによる福音書 1:5)。そして、重く沈む私たち人間一人ひとりを照らし、命のきらめきを、命の大切さを再確認させてくださるのです(「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」ョハネによる福音書 1:4)。

振り返れば、2023年はとかく「自分の正義」ばかりが声高に主張された一年でした。「相手が先に手を出してきたから」と、自己防衛を主張し、相手を蹂躙する軍隊の姿は、私たちに「正義とは何か」を改めて問うてきました。

「あなたは御座に就き、正しく裁き/わたしの訴えを取り上げて裁いてくださる。異邦の民を叱咤し、逆らう者を滅ぼし/その名を世々限りなく消し去られる。」(詩編9:5-6)

これも確かに正義の一つと言えるでしょう。しかし、私たちの生きるこの世界は、一方的に相手を 敵と決めつけ、互いに相手が滅ぼされるようにと祈ってはいないでしょうか。命の大切さを知りなが ら、自分にだけ都合良く物事を見てこなかったでしょうか。一度振り上げた拳を降ろすことは確かに 難しい。それでも、何とかならないかと模索するのが、私たち人間に託された使命だと思うのです。

2006 年、『戦場のアリア』という映画を見ました。1914 年、第一次世界大戦の最中、フランスとドイツの戦線の一部で、共にクリスマスを祝ったという実話に基づく映画です。2022 年には『戦争をやめた人たち』という絵本も出版されました。一般には「クリスマス休戦」として知られているこの出来事は、人間にもまだ平和を造り出すことのできる可能性が残されていることを教えてくれました。もちろん、様々な偶然が重なった結果であることも知っています。前線の全てで休戦が実現したわけではないことも知っています。わずか一日限りのこととはいえ、この休戦を喜ばなかった者がいたことも知っています。それでも、私たちはこの奇跡を忘れてはならないのです。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」(ョハネによる福音書1:14) この「わたしたち」は自分たちに都合の良い「わたしたち」ではなく、この世界に生きる全てを指

しています。味方ばかりでなく、敵(とされている人々)との間にも、イエスは来てくださいました(「見よ、主は地の果てにまで布告される。娘シオンに言え。見よ、あなたの救いが進んで来る。」イザヤ書 62:11)。だから、一日だけとはいえ、戦争をやめようと思う人々が現れたのです(「昼も夜も決して黙してはならない。主に思い起こしていただく役目の者よ/決して沈黙してはならない。」イザヤ書 62:6)。

クリスマスの喜びを一人自分のものとせず、今、救いを求める者全てに届くメッセージとして伝えていきましょう(「シオンにいます主をほめ歌い/諸国の民に御業を告げ知らせよ。」詩編9:12)。たとえ立場が違っても、今、生かされている一人として、クリスマスの喜びを分かち合うのです。

